

公共・政経

哲学分野全範囲まとめ

-- 目次 --

1章	人間とは何か	
2章	ギリシャ思想	ソクラテス プラトン アリストテレス
3章	中国思想	孔子 孟子 老子 荘子
4章	宗教	仏教 キリスト教 イスラム教
5章	西洋思想(1)	ベーコン デカルト カント ヘーゲル ベンサム ミル
6章	西洋思想(2)	キルケゴール ニーチェ
7章	日本思想(1)	聖徳太子 最澄 空海 鎌倉新仏教
8章	日本思想(2)	日本的儒教(林羅山 伊藤仁斎) 国学(賀茂真淵 本居宣長) 西洋思想の受容(福沢諭吉 夏目漱石 内村鑑三)

0章 哲学とは何か

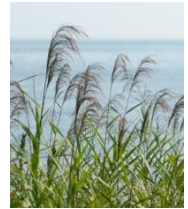
哲学 / philosophy [直訳]知を愛すること

「愛」って何? 何のために生きるの? 「幸せ」とは何か…? これらは答えのない問であるが、生きる上で重要なこと。このような問に答えるため、偉人達が残した考えを知り、自分なりの考えを深めていく学問。それが哲学である。

1章 人間とは何か

最新の科学によると、ヒトとチンパンジーのゲノムの違いは、ほんの1.2%という研究結果が出ている。ではヒトとチンパンジーの“違い”とは何なのか。この「人間の尊厳とは何か」という問いに対し、多くの学者が持論を展開している。

👤 [**パスカル**] (仏・1623～62):「人間は **考える葦** である」(主著『パンセ』)
=人間とは葦のように弱弱しい存在であるが、“考える”という行為ができる点で偉大であると説いた。



+α 🗣️ [**アリストテレス**]:「人間はポリス的(社会的)動物である」

2章 ギリシャ思想

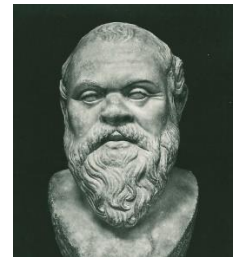
1章の「人間とは何か」という問いに答えるためには、現状を検討するだけでなく、過去の歴史から学ぶこともヒントとなる。人がものを考え始めたころの思想を **源流思想** というが、本章では西洋思想の基となった古代ギリシャ思想を紹介する。

ソクラテス

(469?～399B.C.)

主 著 残っていない

Keyword 「無知の知」「よく生きる」



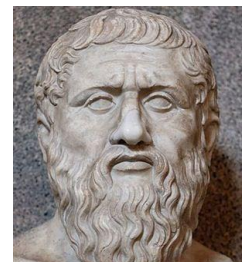
- ★ [**無知の知**] …人間は“自分は何も知らない”と自覚することが、“知る”ことの出発点だと説いた。
自分は分かっていると過信した時点で、人は考えることをやめてしまう。みんなの勉強でも同じだ。
- ★「汝(なんじ)自身を知れ」…自分のことを知りなさいという意味。デルフォイの神殿にこの言葉が刻まれており、ソクラテスはこの言葉を、すべての人が取り組む課題とした。
- ★「ただ生きるのではなく **よく生きる**」…彼の有名な言葉。“よいこと”とは何か。これを考え抜き生きることを説いた。
実際に彼は、無実の罪で死刑を宣告され、仲間に脱獄を勧められるが、それでは法を犯すこととなるという理由で拒否。正しく生きることを最後まで貫き、毒杯をあおぎ死んだエピソードが残っている。

プラトン

(427～347B.C.)

主 著 『国家』『饗宴』
『ソクラテスの弁明』

Keyword 「イデア界」「エロース」
「哲人政治」「二元論」

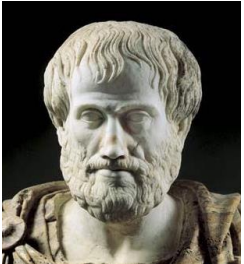


ソクラテスの弟子として新たな思想を展開したのが、プラトンである。

★〔³ **アイデア** 〕: 移り変わる現実世界とは別にある、絶対的に理想的なもの。

この世界に完璧なものは存在せず、現実にも満足することなく理想を求め続けることが重要と説いた。
このように、理想となるアイデアを求める知的な愛を〔⁴ **エロース** 〕と呼んだ。

以上のように、人間が“知の探究”をすることを重視した彼は、「哲学者」こそが人としての理想だと考えた。
したがって、理想の政治は哲人(哲学者)によるもの(=〔⁵ **哲人政治** 〕)と説いた。

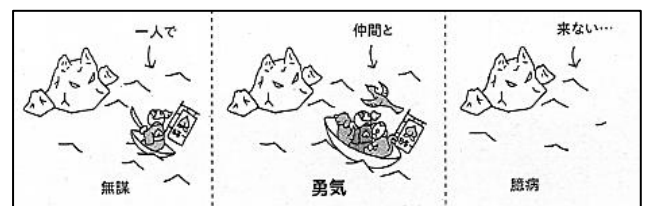
<h1>アリストテレス</h1> <p>(384~322B.C.)</p>	主 著	『形而上学』『政治学』 『ニコマコス倫理学』	
	Keyword	『形相』『質料』『正義』『友愛』 『中庸(メソテース)』	

プラトンの弟子でありながら、師匠の理想主義を否定して、より現実に即した考えの必要性を説いたのがアリストテレスである。
彼は人間がどうやったら幸福になれるかという問いに対し、「**徳**」を重視した。(道徳とか人徳という意味で現在も使われる)

「正しい行動」を取るときに気をつけるべき事



中庸(メソテース): ひとことでは「ちょうどいい」行為。
両極端を避けることで、人はよい習慣を身につけることができる。



そして、国を作るうえで重要と説いたのが、〔⁶ **正義** 〕と〔⁷ **友愛** 〕の徳である。


正義: 法を守ること、富や功績を公正に配分すること、不正を罰し秩序を守ること

友愛: お互いが相手の幸福を思い合う愛。完璧な友愛があれば、正義がなくなっても共同体はうまくいくと考え、正義よりもこの友愛をより重視していたといえる。

3章 中国思想

春秋・戦国時代へ突入した時代、富国強兵策をとり、内外から有力な人材を登用するようになった中国で、有力な思想家たちが学説を競い合うように。この時活躍した思想家たちは**諸子百家**と呼ばれ、中国思想の源流を形成していった。

主な思想としては、孔子・孟子を代表とする〔⁸ **儒家** 〕と、老子・莊子を代表とする〔⁹ **道家** 〕が有名である。

<h1>孔子</h1> <p>(551?~479B.C.)</p>	主 著	『論語』	
	Keyword	『仁』『克己復礼』『徳治主義』	

孔子は、人と人の中に生まれる親愛の心を〔¹⁰ **仁** 〕といい、他者を敬う態度や振る舞いを「**礼**」と呼んだ。

★「己に克ちて礼に復る」=〔**克己復礼** 〕自分のわがままや欲望に勝って、礼に外れた行動をしないことで仁が実現する。

⇩ これを体現していけば理想的な国家が生まれる

〔**徳治主義** 〕: 仁と礼を備え、正しい道を求めて修養する者(=君子)によって、人徳により国民を統制していく考え方

孟子

(327?~289B.C.)

主 著 『孟子』

Keyword 「性善説」「四端の心」
「四徳」



◎孟子の代表的思想 = [性善説] = 人間は本来、善におもむこうとする性質をもつ説。

人間の本性は善人であり、元々持ち合わせている「四つの良心」を磨けばよい。 = [四端の心]
→その良心をそれぞれ育てていけば、「四徳」(仁・義・礼・智)となる。

老子

(生没年不詳)


主 著 『老子』

Keyword 「無為自然」
「柔弱謙下」「小国寡民」



★^[11] **無為自然**]: ありのままで生きることを理想とし、自然に任せて生きることを説いた。

cf.「大道廢れて仁義あり」= 本来自然にあった「道」が廢れたために、人為的な道徳で社会を秩序づけようとする儒教が生まれたと儒教を批判。

 ^[12] **莊子**] (紀元前4世紀頃) 道家の代表的思想家。すべてのものに差はなく等しいとする**万物斉同**を説き、心を無にして自然に従い生きることを理想とした。

《その他の中国思想家》

孟子を批判し性悪説を説いた…荀子 / 朱子学…朱子 / 陽明学…王陽明

4章 宗 教

日本においても太陽を始めとするあらゆる自然事象の中に「神」を見出し(=アニミズム)、古くから言い伝えられてきた。世界では民族や国家の枠を超えて広まっている宗教もあり、**キリスト教・イスラム教・仏教**は**世界三大宗教**とよばれている。

① **仏 教** 仏教はインドの^[13] **ゴータマ・ブッダ**] (仏陀)によって生まれた宗教である。

「仏陀」とはサンスクリット語で「目覚めた者」という意味。ブッダの教えには、現在の私たちにも生かせるものが多い。

ゴータマ・ブッダ

生 涯

釈迦族の王子として生まれる。
29歳の頃に出家し苦行を経験した
末に悟りを開き、教えが広まる。

Keyword 「諸行無常」「縁起」「慈悲」



★仏陀が悟ったこと →「苦が生じる原因は何か。苦を減ぼす方法は何か。」

〈原因〉

[¹⁴ 諸行無常]… この世のすべてのものは移り変わり、永遠不変なものなど存在しない。

[¹⁵ 諸法無我]… 万物は変化し、消滅し続ける。それ自体で存在しているものはない。

これを理解せず、自分の欲望や思い込み・執着 (= 煩悩) があるから、人は苦しむのである。

※仏陀は何事も原因によって生じる、[縁起] という考えを示した

→ 煩悩を減ぼすためには正しい修行が必要である。修行を通して苦しみから逃れることはできないと悟ること。
そして、すべての生き物に対し、[¹⁶ 慈悲] の精神をもって接することができればよいと説いた。

仏陀の教えは、彼の死後も言い伝えられ、[¹⁷ 大乘] 仏教や[¹⁸ 上座部] 仏教としてアジアを中心に広まっていくこととなった。

ブッダは現代に生きる私たちにも響く言葉を数多く残している。その中から、受験生のみなさんにぴったりの言葉を2つ。

“自分を変えるのは自分だけ。どんなに大きな変化もすべてあなたの一歩から。”

“大切なのはどう考えるかです。結局、人間は自分の考えたようにしかありませんから。”

② キリスト教

キリスト教はそれ以前の「ユダヤ教」を母胎とした宗教である。

ユダヤ教は、唯一神ヤハウェ絶対的な神として信じ、神から与えられた掟(律法)にしたがって生きることを求めた宗教である。しかし、この掟を守っていても人々の生活が改善されることはなく、新たな教えを宣教していったのがイエス。

イエス・キリスト

(4B.C.~30A.D.頃)

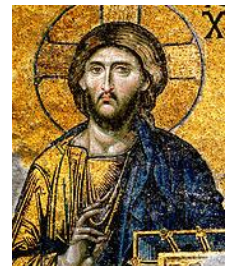
主 著

『新約聖書』

※イエスの教えや弟子の言葉が記載

Keyword

「神の愛(アガペー)」
「隣人愛」



★イエスの教え

ユダヤ教 → 裁き の神
律法を守らないと救済されない
→ 律法を形式的に遵守



イエス → 愛 の神
律法を守ることは神の愛に答えること
→ 神への忠誠心をもつことが重要

* 人間が守るべき二つの戒め

- [¹⁹ 神への愛]: 「心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ」
- [²⁰ 隣人愛]: 「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ」

* キリスト教最高の教え

・[黄金律]: 「何ごとでも人々からしてほしいと望むことは、人々にもその通りにせよ」

神は、不完全な人間のために恵む、絶対的な愛([²¹ アガペー])をもっており
それに答えることで人々は救われると説いた。 = 無差別・無償・自己犠牲的な愛

イエスの死後、パウロなどによる教義の確立や、宣教師による伝道の努力により、キリスト教の教えは世界中に広まった。

③ イスラム教


イスラム教はアラビアにあらわれた預言者〔²² **ムハンマド** 〕によって開かれた宗教である。唯一神アッラーを信じる宗教であり、アッラーの言葉が記された〔²³ **クルアーン** 〕に従った生活をするのが、神への服従(=イスラム)であるとする。生活のルールは六信五行としてまとめられ、信者はこれを守っている。

ムハンマド

(570? ~ 632)

生涯

40歳ごろに神の啓示を受け、
イスラム教の開祖者となる。
偶像崇拝禁止のため、写真は無い。



Keyword **『六信五行』『クルアーン』**

六信 6つの 信仰対象	アッラー	唯一神アッラー
	天使	神と預言者の仲介者 (大天使ガブリエルが最上位)
	啓典	神の啓示を示す書 (『クルアーン』や『聖書』の一部など)
	預言者	神の意志を伝える者 (モーセ、イエス、ムハンマド)
	来世	今の人間活動の報いを受ける場
	天命	全ては神アッラーの思うような運命に左右されること

五行 5つの 行動義務	信仰告白	ラ・イラーハ・イッラッラー ムハンマダン・ラスールッラー 「アッラーは唯一神」「ムハンマドはその使徒」と言う。
	礼拝	1日5回、1回約20分、メッカの方向に向かって祈る。
	断食	決められた時期(イスラム暦で9月)に、日の出から日没まで飲食禁止
	喜捨	貧者を助けるための、救貧税を納める
	巡礼	一生に一度は、聖地メッカのカーバ神殿へ巡礼に行く。

5章 西洋思想(1)

中世のヨーロッパは、形骸化したキリスト教による支配があり、全てが「神」中心で回っていた。人々の自由意志はなく、神から外れた思想・学問・芸術、金儲けもNGという社会。そんな背景の中で、商業の発達により富を得る市民を中心に、人間の尊厳を取り戻そうとする動きがおこる。

- 〔²⁴ **ルネサンス** 〕(文芸復興):キリスト教以前の文化(古代ギリシャやローマ)を復活させようとした運動。
イタリアからヨーロッパ諸国に広がる。
- 〔 **ヒューマニズム** 〕(人文主義):キリスト教的な考え方を離れ、人間性を探究・回復する試み。
- 〔²⁵ **宗教改革** 〕:教会の権力に従うのではなく、聖書を通して本来の信仰を取り戻そうとする動き。

★ルネサンス期に活躍した人物

文学	・ダンテ 『神曲』	・ボッカッチョ 『デカメロン』	・ペトラルカ 『抒情詩集』
芸術	・ボッティチェリ:『ヴィーナスの誕生』	・レオナルド・ダ・ビンチ:『最後の晩餐』、『モナリザ』	・ミケランジェロ:『ダヴィデ像』、『最後の審判』
		・ラファエロ:『聖母子像』、『アテネの学堂』	

★宗教改革で活躍した人物

ルター (1483 ~ 1546)

カルヴァン (1509 ~ 64)


★近代科学の考え方を築いた人物たち

26 コペルニクス	天文学者として、従来の天動説に対して地動説を唱えた。
27 ガリレオ・ガリレイ	イタリアの数学・物理学者で、物体運動の法則を発見。
28 ケプラー	ドイツの天文学者でケプラーの法則で知られている。
ニュートン	万有引力の法則

★モラリストの登場

モラリスト …人間の本性を観察し、「人間らしさ」「人間の生き方」について探究した。

モンテーニュ (仏:1533~1592) 主 著 『エッセー』
 Keyword 「私は何を知るか」 (ク・セ・ジュ)




パスカル (仏:1623~1662) 主 著 『パンセ』
 Keyword 「人間は考える葦である」



★経験論と合理論 近代の合理的な考え方の確立に、大きな役割を果たしたのが〔²⁹経験論〕と〔³⁰合理論〕である。

F. ベーコン (英:1561~1626) 主 著 『ノヴム・オルガヌム』
 Keyword 「経験論」「イドラ」「帰納法」「知は力なり」



経験論: ベーコンを代表として発達した、人間の知識は「経験」から生まれていくという考え方。

他にも、ロックやバークリー、ヒュームらが継承しており、イギリスを中心におこったことから「イギリス経験論」とも言われる。

★ベーコンの思想

* 知識を得る方法〔³¹ 帰納法 〕

1つ1つの事実を、実験・観察を通じて検討し、最終的に普遍的な真理・法則を導くやり方。




正しい知識を得るためには、思い込みや錯覚、偏見 = 〔³² イドラ 〕などを取り除く必要がある。

ベーコンが注意した4つのイドラ

- ①**種族**のイドラ:人間が生まれつき持っている、感覚による思い込み。(例:目の錯覚)
- ②**洞窟**のイドラ:育った環境で身についた偏見。(例:家庭環境、読んだ本、トラウマ)
- ③**市場**のイドラ:人間が集まる中での噂や間違い。(例:ネットの情報、根拠のない噂)
- ④**劇場**のイドラ:権威を信じ込むことによる偏見。(例:番組の情報、偉人の言葉)

以上のイドラを除去し、個々の事物に直接あたって実験や観察を繰り返すことで、正しい知識を得る。

<h1>デカルト</h1> <p>(仏:1596~1650)</p>	主 著 『方法序説』	
Keyword	『合理論』『演繹法』 『方法的懐疑』 『我思う、ゆえに我あり』	

合理論:デカルトを代表として発達した、人間の知識は確実な知識を基に「推論」を重ねて答えを導くとする考え方。
他にも、スピノザやライブニッツらが継承しており、ヨーロッパ大陸を中心におこったことから**『大陸合理論』**とも言われる。

★デカルトの思想


* 知識を得る方法〔³³ **演繹法** 〕:確実な原理を出発点とし、論証を積み重ねて、全ての知識を理論的に導き出す方法



正しい知識を得るためには、全てのことを徹底的に疑い = 〔³⁴ **方法的懐疑** 〕、検証を重ねる。

★ドイツ観念論

旧来の考え方を打破するために、イギリスやフランスでは市民革命が起きたが、ドイツは支配者の力が強く、盛り上がらなかった。
そこで、外面的な社会変革より内面的な道德世界を確立しようとする動きがおこる


<h1>カント</h1> <p>(独:1724~1804)</p>	主 著 『純粋理性批判』 『実践理性批判』	
Keyword	『仮言命法』『定言命法』 『人格』『道德法則』	

* カントの目指した世界 : 〔 **善意志** 〕に基づく〔 **道德法則** 〕に従った世界

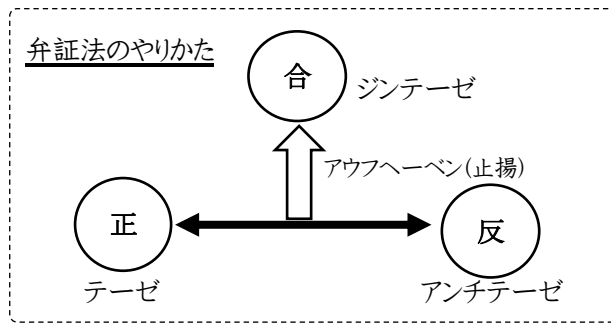
○〔³⁵ **定言命法** 〕:どんな場合でも~する。

×〔³⁶ **仮言命法** 〕:○○したければ~する。○○な時には~する。

このように、外からの影響で自分自身を変えるのではなく、正しい道德法則に自ら従うことが重要であると説いた。
人間がそれぞれ自分自身の人格を持ち、互いに尊重し合うことによって結びつく社会を理想とした。(=〔³⁷ **目的の国** 〕)
彼はまた、永久平和の実現に向けて世界全体での組織が必要であると説き、国際連盟の結成に影響を与えたといわれている。

<h1>ヘーゲル</h1> <p>(独:1770~1831)</p>	主 著 『法の哲学』 『精神現象学』	
Keyword	『人倫』『弁証法』	

ヘーゲルは、すべての事柄の発展には対立が要因となっており、それを乗り越えることにより、新しい段階が生まれると考えた。その原理のことを〔³⁸ **弁証法**〕と呼ぶ。



具体例 ～連絡手段の発展～

- ・正：固定電話（外で連絡が取れない）
- ・反：公衆電話（どこでもあるわけではない）
↓止揚
- ・合：携帯電話（どんな時どんな場所でも
連絡が取れる！！）

現実の人間関係(=〔³⁹ **人倫**〕)についても、ヘーゲルは弁証法的に説いている。まず一番身近な人倫として〔**家族**〕が挙げられるが、個人の独立性はない。人が個人として独立し形成されるのは働きにでたときの〔**市民社会**〕である。しかし、市民社会では家族のような結びつきが薄い。そこで、家族における「相互の結びつき」と市民社会の「個人の独立性」を兼ね備えるものとして、〔**国家**〕が重要になると説いた。

★功利主義

産業革命に成功したイギリスは世界一の資本主義国家へと躍進していた。資本家が利潤追求に必死になる中、個人の幸福と社会全体の幸福の繋がりについて考察した思想家が登場した。この考え方を**功利主義**という。

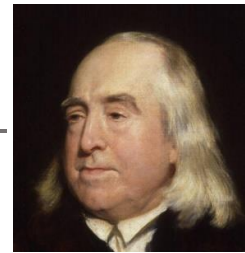
ベンサム

(英:1748～1832)

主 著 『道徳および立法の諸原理序説』

Keyword

「快樂計算」
「最大多数の最大幸福」



ベンサムは、人間は快樂を求める存在であるとし、人々に快樂を与える行為が「善」、苦痛を与える行為は「悪」と考えた。快樂は数量化して計算できる(=〔⁴⁰ **快樂計算**〕)として、できるだけ多くの人々に多くの快樂を与える制度を整備しようと説いた。このように、ベンサムの功利主義は「快樂の量」に着目していることから、**量的功利主義**と呼ばれることもある。

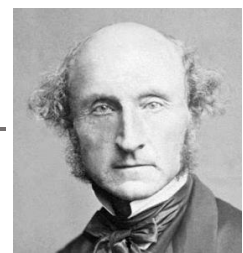
J.S.ミル

(英:1806～1873)

主 著 『自由論』

Keyword

「精神的快樂」
「質的功利主義」



ベンサムの功利主義に対し、快樂の質に着目したのがJ.S.ミルである。彼は、計算できない部分の内面的快樂(**精神的快樂**)を重視し、社会や他人の役に立とうとする「**献身の行為**」の重要性を説いた。


※一方で、この功利主義に対して批判的な考えをもつ者もあらわれる。


ロールズ (1921～2002) : 功利主義の考え方では、恵まれない人々への配慮が欠けているとして財の公正な分配 (**公正としての正義**) の重要性を説いた。
自分が何者かわからない状態 (**無知のヴェール**) で公正な仕組みを考えることが重要

セン (1933～) : インドの経済学者。幸せの価値は一つの基準では測れないと功利主義を批判し、〔⁴¹ **潜在能力**〕(人々がしたいことを実現できる能力)の開発を確保できるように財を分配するべきと説いた。

★プラグマティズム

現代の問題を伝統的な西洋哲学で解明することは出来ないとして、アメリカで新たに生まれた考え方を**プラグマティズム**という。日本語で**実用主義**といい、事物の価値を「いかに生活に役立つか」という点から捉えた。アメリカらしいシンプルな思想だ。

 **パース** (1839 ~ 1914) : プラグマティズムの創始者

 **ジェームズ** (1842 ~ 1910) : プラグマティズムの普及者
ある概念が正しいかどうかは、それが生活に役立つかどうか(有用性)によって決まると説いた

 **デューイ** (1859 ~ 1952) : プラグマティズムの大成者

彼の思想 **知性**: 真理を探究するはたらくで、**問題解決**に向かって行動を導く能力。つまり知性は有用な道具だ
→ これを身につけるために修得の場が必要 = **学校**や**教育**の重要性を説いた。



6章 西洋思想(2)

19世紀のヨーロッパ。経済発展を遂げる中で、組織の歯車のように扱われ、人間性の喪失が問題になる。真の自己のあり方、自己の生き方を見つめ直そうとし、一人一人の人間性を回復していこうとする動きがおこる。資本主義の批判をしたマルクス、実存主義の祖といわれるキルケゴールなどが登場する。

★実存主義

キルケゴール

(丁抹: 1813 ~ 1855)

主 著

『あれかこれか』
『死に至る病』

Keyword

『実存』『主体的真理』



他人に合わせると、自分を見失ってしまうから、自分にとっての真理(= [42] **主体的真理**)を探し、それに基づき生きていくことをめざした。

彼が疑問に思ったこと 「今の時代では、人間は皆組織の歯車だ。周りに合わせて、主体性を失っている。」

そこから脱却するためには、多大な“エネルギー”が必要となるが、突き詰めるほど**不安**や**苦惱**、**絶望**を感じてしまう。

でも、人間はその**不安**や**苦惱**・**絶望**を通して**真実の自分**を見つけられるのではないか？絶望から目を背けるな。

《**実存の三段階**》 彼は生き方のヒントをヘーゲル哲学に求める。

① [**美的実存**] : 快楽を求め、享乐的に生きていく。



×「あれもこれも」追い求めてしまうため、自己を見失いがち。

② [**倫理実存**] : ①を改め、真剣かつ良心的に生きる。「善い」ものを選択しようとする。



×人間は不完全なので、良心的になればなるほど、自分の無力を痛感し絶望に陥る。

③ [**宗教実存**] : 自己の無力を自覚し、神への情熱的な信仰に生きる。

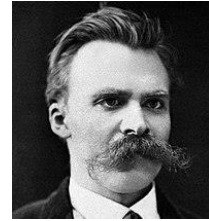
結論: 「その為に生き、その為に死にたい」と思うような真理を見つけ、情熱をもって生きよ。

ニーチェ

(独:1844~1900)

主 著 『ツァラトゥストラはこう語り』
『力への意志』

Keyword 「ニヒリズム(虚無主義)」
「神は死んだ」



19世紀のヨーロッパは、生きる意味や目的を喪失した〔⁴³ **ニヒリズム**〕(虚無主義)に陥っている。この時代、キリスト教の存在意義は失われつつあった。→その状況をニーチェは「**神は死んだ**」と表現

無価値な人生を直視し、虚無感を乗り越えていこうとする力をもて。(=「力への意志」)
それをできる人を〔⁴⁴ **超人**〕と表現した。

サルトル

(仏:1905~1980)

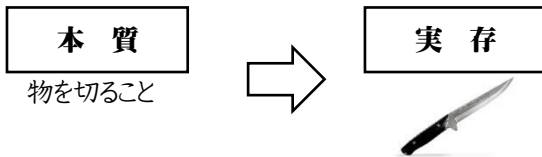
主 著 『実存主義とは何か』
『存在と無』

Keyword 「アンガジュマン」
「実存は本質に先立つ」

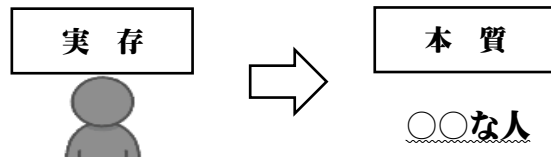


★サルトルの思想

もの=本質(役割)のために存在する



人間=存在が先にあり、本質は自分で形成していく



人間においては、「 **実存は本質に先立つ** 」

つまり、人間は“自分次第で自分を作りあげることができる存在”なんだ。

しかし、裏を返せば…人間は自由であるが故、自分の行動全てに責任を負わなければならない、サルトルは、人間はまさに、「 **自由の刑に処されている** 」と表現した。人間は、自由と責任から逃れることはできないからこそ、社会の中への自己拘束、自己参加=〔⁴⁵ **アンガジュマン**〕を通して、社会の中で責任感を育み生きていくことが重要であると説いた。

★その他の実存主義者


ハイデッガー (独:1889~1976) :世の中の人々は、死を恐れ怯えるため(=「**死への存在**」)、周囲に合わせて自分を埋没させてしまう、主体性に欠けた人間になってしまう。


ヤスパース (独:1883~1969) :われわれ人間は、死・苦・闘い・罪など、人間として超えられない壁(=**限界状況**)から逃れられない、不安な存在である。彼にとって、ナチスの弾圧がまさにそれであった。それを我々に与えた試練なのだと思え、他者との連携の中で生きる重要性を説いた。

★その他の西洋思想家

レヴィ・ストロース (仏:1908~2009) keyword 「**構造主義**」 「**野生の思考**」
南米諸部族の神話研究などを通して、文化と自然を調和させるための「野生の思考」は科学的思考に劣らないと説いた。

ホルクハイマー、アドルノ : 「**フランクフルト学派**」 ナチスによってドイツを追われた人々を中心に形成

 **フーコー** (仏:1926 ~ 1984) keyword 「**理性を批判**」 「**狂気**」
知性のある理性的な存在を正当化し、そうでないものを狂気と排除してきた歴史を批判。普遍的であることを求められることで、人間は無意識的に主体性を失っていくと説いた。彼が同性愛者として異端視された経験が影響している。

 **ハーバーマス** (独:1929 ~) keyword 「**対話的理性**」

 **シュヴァイツァー** (仏:1875 ~ 1965) keyword 「**生命への畏敬**」 アフリカでの医療活動や原水爆禁止運動を進める

 **ガンディー** (印:1869 ~ 1948) keyword 「**アヒンサー (不殺生)**」「**非暴力・不服従**」

7章 日本思想(1)

日本は明治維新以後、欧米諸国と同じ近代化を迎えたかのように見えるが、それまでの伝統は全く異なるものである。日本の思想・文化というのはどのような特色を持っているのだろう。『神話』の時代まで遡り、日本らしさの源流を紐解く。

★日本の神 = あらゆる自然の事象の中に神を見だし、不可思議で人々に畏怖の念を抱かせるものは全て神と捉えた。それらの多くの神を総称して「⁴⁶ **八百万の神**」と呼んでいる。

・人々の予測を超える事態、重大な災厄が突発した場合、神が目の前にやってきたと捉えられた。= **祟り**
⇒神のごきげんをとるために…**祭祀**を行なった。お供え物をささげて、神の欲求を満たすため。

・神に対する心のあり方として〔⁴⁷ **清明心**〕(偽りなく、つくろい飾ることのない心)を尊重した。
中世では「**正直の心**」、近世以降は「**誠の心**」として、現代まで受け継がれている。

★日本的仏教の形成

聖徳太子

(574 ~ 622)

主 著 『**三経義疏**』

Keyword 「**十七条の憲法**」「**和**」



伝 来

・仏教の伝来 = 6世紀中ごろ、当初仏は蕃神(外国からきた神)と呼ばれていたが、聖徳太子が理解し、
仏教の教えを説くように。仏教の教えで平和な社会の実現を期待し、〔**十七条の憲法**〕を制定

第1条:和をもって貴しとなす。= 和を重んじて、みんな仲良くしよ。

第2条:篤く三宝を敬へ。三宝は仏法僧なり。= 心から三宝を尊重しよう。三宝とは**仏(仏陀)・法(仏教の教え)・僧侶(修行者)**

・『**三経義疏**』:『法華経』『勝鬘経』『維摩経』の3つを研究し、まとめた注釈書。

・「**世間虚仮、唯仏是真**」:今の世界は移り変わっていくはかないものであるが、仏は揺らぐことがない



隆盛:奈良仏教

太子のおかげで日本に根付いてきた仏教は、奈良時代に完全定着する。

仏教の力で実現しようとした国家 = [**鎮護国家**] : 「仏の力で、荒れた国を鎮め、国を護る。」



[**行基**] : 僧に戒を授けるために来日。当時上皇だった聖武天皇も戒^{※1}を受けた。

※1 よい習慣を身につけようという誓い



[**鑑真**] : 民間への布教、社会事業に尽力。聖武天皇にも敬われ、大仏建立に参加。



展開:平安仏教

仏そのものの教えを追い求めて、より深くまで仏を理解していこうとする。新たな方向性を出した2人の僧



[⁴⁸ **最澄**] : 比叡山に延暦寺を建て、[**天台宗**]を開いた。主著『**顕戒論**』『**山家学生式**』

↓
すべての生きとし生けるものは仏となる可能性 (= [⁴⁹ **仏性**]) をもっている

「**一切衆生、悉有仏性**」という大乘仏教の教えを信念として、多くの僧を育てた。

この後登場する鎌倉時代の僧たちは延暦寺出身の僧が多い！



[⁵⁰ **空海**] : 高野山に金剛峯寺を建て、[**真言宗**]を開いた。主著『**三教指帰**』

→人は**三密の修行**(①手を組み合わせる②仏の真言を唱える③仏を指して瞑想)をすることで、

[**即身成仏**] (=人間の体のまま仏になること)をとげることができる。

★2人の覚え方 「天才の真空パック」(天台宗・最澄 ⇄ 真言宗・空海)



鎌倉新仏教

平安時代末期から鎌倉時代にかけて、浄土信仰をさらに深めてさまざまな独自の教えが生まれた。

鎌倉時代は日本仏教の黄金世代！スターたちが揃っている。この頃の仏教を総称して鎌倉新仏教と呼ぶ。



[⁵¹ **法然**] : 浄土宗の祖。主著に『**選択本願念仏集**』がある。

浄土に行くためには、修行を捨てて念仏に専念したほうがいい！ = [**専修念仏**]

修行して自力で浄土に行くなんて無理。だからとにかく「南無阿弥陀仏」と念仏を唱える！



[⁵² **親鸞**] : 浄土真宗の祖。主著に『**歎異抄**』、『**教行信証**』など

法然の弟子なので根本的には類似しているが、親鸞はさらに徹底的に他力にすぎることを説いた。

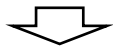
= 絶対他力

[**悪人正機説**] : 「善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」

(意味) 善人でさえ仏の真の世界に行くことができるのに、どうして悪人がいけないだろうか。

親鸞の考える善人悪人

- 善人: 自力で修行して仏からの救済を目指す人。
- 悪人: 自分の限界を知り、他力にすぎることしか考えてない人。



悪人については、自分の不完全さを自覚している人こそ、仏に救済されるべき人だと考えた。

このように、阿弥陀仏の力にすぎる人には、阿弥陀仏が自ずから力をはたらかせてくれる (= 自然法爾)と説いた。

★一方で、自力で悟りを得ることも可能と説いた人が登場



〔⁵³ **道元**〕：曹洞宗の祖。主著『正法眼蔵』

坐禅による自力の救済をめざす。ただひたすら無心で坐禅をすること(=〔⁵⁴ **只管打坐**〕)で身も心もつくと坐り抜くと、心が無い境地に入る(= **身心脱落**)

《法華経信仰》法華経:ブツダの晩年の教えを中心にまとめられた長編の経典である『妙法蓮華経』の略称。



〔⁵⁵ **日蓮**〕：日蓮宗の祖。主著『立正安国論』

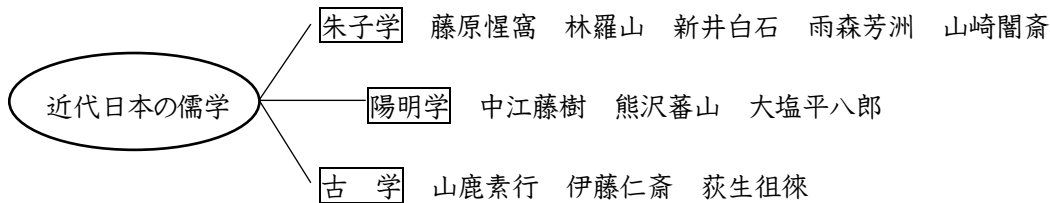
「この法華経こそ、末法の世を救う唯一の経典だ。」

⇒〔⁵⁶ **南無妙法蓮華経**〕の題目をひたすら唱えること。(=唱題)⇒誰でも仏になれる!!!

8章 日本思想(1)

時代は江戸時代に入ること、日本では仏教の他にも、中国から伝わった**儒教**が浸透し、日本人の生き方の基本となっていた。一方で、日本古来の文化を見つめなおそうとする**国学**も、同時期に流行した。明治時代以降になると、**西洋思想**を日本文化と融合させる思想家が登場し、現代の日本人の礎を築いていった。

★**儒学** = 孔子の教えを受け継ぎ、発展させた学問。今をどのように生きるべきかという道徳的な要素が強い。



朱子学:江戸幕府が正式な学問として採用。(江戸幕府が理想とした、身分がはっきりしたタテ社会に必要な教えだったから。)



〔**藤原惺窩**〕:近代儒学の祖。もともと仏教の修行者だったが、仏教があまりに今の世界とかけ離れていることから僧の身分を捨て、儒学者として儒教の研究に励んだ。

林羅山

(1583~1657)

主 著 『三徳抄』『春鑑抄』

Keyword 「上下定分の理」
「存心持敬」



〔**林羅山**〕:日本朱子学の大成者

教え①**上下定分の理**:天は高く、地は低い。この自然同様に万物には上下尊卑の秩序がある。

それは人間も同じであって、身分の上下関係に従わなければいけない。


教え②**存心持敬**:つつしみによって欲を捨て、敬意をもち身分制度にしたがって行動すること



〔**山崎闇斎**〕:羅山の朱子学をさらに厳しく徹底した。神道(日本の神についての思想)を研究していた彼は、朱子学の理論と日本の神の一致を説く、〔**垂加神道**〕を唱えた。

〔**新井白石**〕:幕府の顧問となり、正徳の治を推進。『西洋紀聞』を著わし、西洋の地理や風俗を記録。


陽明学 理論ばかり押しつけてくる朱子学に疑問をもち、より実践的な独自の儒学として生まれる。

〔 **中江藤樹** 〕:陽明学の祖。道徳の根源である「考」(≡親愛と尊敬の心「愛敬」)を重視。
⇒外面的な規範に従うだけでなく、自らの内面に従い、時と場所、身分に応じた道徳を実現すべき。


《その他の陽明学者》〔 **熊沢蕃山** 〕:岡山藩の重役を務めた。


古学:儒教の原点に立ち返り、大元である孔子・孟子の思想を直接くみ取っていこうとする立場。

* 特に重視されたこと = 「**誠**」 : あるべきあり方と自己とが一致し、誤りや偽りのないこと。

〔 **山鹿素行** 〕:武士のあり方を主張。主著『聖教要録』
〔**教え**〕 当時の身分制度は、「士と農工商」。武士は最高ランクとして政治を行なう立場にあった。
だから、武士は道徳的に優れた、農工商の手本になるべき。

戦国時代までの武士道 $\xrightarrow{\text{批判}}$ 山鹿による新たな武士道 (= 士道)
「武士は潔く死ぬのがかっこいい。」 「武士は、農工商の手本となる人格者であれ。」


〔⁵⁷ **伊藤仁斎** 〕:主著『童子問』
〔**教え**〕 仁愛が成り立つ社会を理想。cf.「我よく人を愛すれば、人またよく我を愛す。」(『童子問』より)
→「誠」(=「真実無偽」)の心に至ることができる。

〔⁵⁸ **荻生徂徠** 〕:主著『弁道』『政談』
〔**教え**〕 中国古代の先王が天下を治めるために制作した道(〔⁵⁹ **礼楽刑政** 〕)に、儒学本来の精神がある。
※礼楽 = (礼儀と音楽)・刑政 = (刑罰と法律)を整えていた → 安天下(国家の安泰)の実現
この先王に見習って、政治を行なう者は、主観的な心情ではなく、どのような行動をして、どのような結果をもたらすかが重要!


★国学

国学 =『万葉集』や『古事記』のなかにある、日本固有の道徳や思想を研究する学問。


-背景- 儒教は中国から流れてきたもの。中国古代の社会を手本としているが崇拜しすぎではないか?
⇒ここは日本なんだから、古き日本の文化からこれからの生きる道を探求していこう。

〔⁶⁰ **賀茂真淵** 〕:『万葉集』を中心に古典を研究。本居宣長の師匠。主著は『国意考』など
〔**教え**〕 『万葉集』の歌をよみながら、日本人らしさの発見。

⇒
・〔 **ますらをぶり** 〕:男性的でおおらかな心
・〔 **高く直き心** 〕:力強くありのまま心

〔 **本居宣長** 〕:国学の大成者。主著は『古事記伝』など。
〔**教え**〕 ①『古事記』に書かれている日本神話の神々に着目。⇒日本神話に登場する神様は、素直でおおらかである。
私心を捨ててこれらの神々のような振る舞いを心がけよう! = 「**惟神の道**」
②『源氏物語』の研究 →〔⁶¹ **もののあはれ** 〕:しみじみとした感情の揺れ動き
③『古今和歌集』の研究 →「**たおやめぶり**」:女性的で優美なこころ

★西洋近代思想の受容 江戸時代から明治時代にかけて西洋の思想が取り入れられる。


福沢諭吉 (1834~1901)	主 著	『学問のすゝめ』 『西洋事情』	
	Keyword	『天賦人權』 『脱亜論』	


諭吉のねらい = 封建制の打破 (= 身分制度反対!)


彼は大分県の下級武士(いい身分じゃない)として生まれたが、出世ができず身分の低いみじめさを身をもって経験していた。


↓
名言「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずといへり」= [天賦人權]

教え 人間が平等であるためには、国民一人一人が自尊心をもつこと。つまり、[独立自主] の精神を持つべきである。
これを身につけるためには、儒教的な道徳ばかり学ばず、数学・地理・経済といった実用的な学問 (= 実学) に励むべし。

 [佐久間象山] 朱子学と陽明学を学んだのち、洋学の摂取に努めた。
東洋の道徳 (和魂) と西洋の技術 (洋才) の両方を取り入れて国力の充実を目指す

 [吉田松陰] 佐久間象山の門下で学び、松下村塾を開く。


 [中江兆民] : 東洋のルソー。自由民権運動の理論的指導者として活躍。主著『民約訳解』

 [夏目漱石] : 西洋思想を学びつつ、伝統を内から開発する「内発的開化」の必要性を説く。

★キリスト教の受容


1873 キリタン禁令が解かれると、キリスト教が知識人の間に広まるようになる。


⇒ 新島襄、植村正久、新渡戸稲造らはキリスト教精神に基づく教育に力を注いだ。

 ⁽⁶²⁾ **内村鑑三**] : 神の前には全ての人間が平等。「二つの J」《イエス (Jesus) と日本 (Japan)》に仕えよと説く。
従来の「武士道」に「キリスト教精神」を接ぎ木していくように、組み合わせしていく。


★その他の日本思想家

○民俗学者

 **柳田国男** : 死者の靈魂は住み慣れた村落の周辺にとどまり、幸福をもたらすと信じられた。

 **折口信夫** : 安全を祈り、他界からの存在を招く文化があった。「まればと」(客人) という言葉で表わした。

○昭和期の新たな思想

 **西田幾多郎** : 西洋哲学や禪の体験をもとに、独自の哲学体系を生み出す。 **keyword** 『純粹経験』 『善の研究』

 **和辻哲郎** : 人間は常に人と人との関係においてのみ人間になる「間柄的存在」である。 **keyword** 『風土』